

セーリングを学校授業に採用 山形県のユニークなチャレンジ

地元セーラーのディレクションでお届けする本シリーズ。
今回は、セーリングを教育に積極的に活用する山形県を紹介。
7月には全国中学校ヨット大会が温海鼠ヶ関マリナーで開催される。

ディレクター／齋藤和久（山形県セーリング連盟副会長）

飛島／酒田市

クルーザーレースやクルージングで県内外のヨットが訪れる。日本最北のサンゴ群生地があり、亜熱帯性の魚も見られる人気のダイビングスポット。飛島中学校ヨットクラブではOPの船底にアクリル板を張って、海底のサンゴを見ながらセーリングしていたという。

酒田市ヨット連盟／酒田市

市連盟の外洋部（クルーザー）は長年、障害者ヨット体験を開催。最上川河口で座礁したオーストラリアのヨットを救助し、再出航を支援したボランティア活動では県から表彰を受けている。酒田ジュニアでは30年前のクラブ員勧誘のときにすでに小学校のプールにOPを浮かべていた。

鶴岡市ヨット連盟／鶴岡市加茂

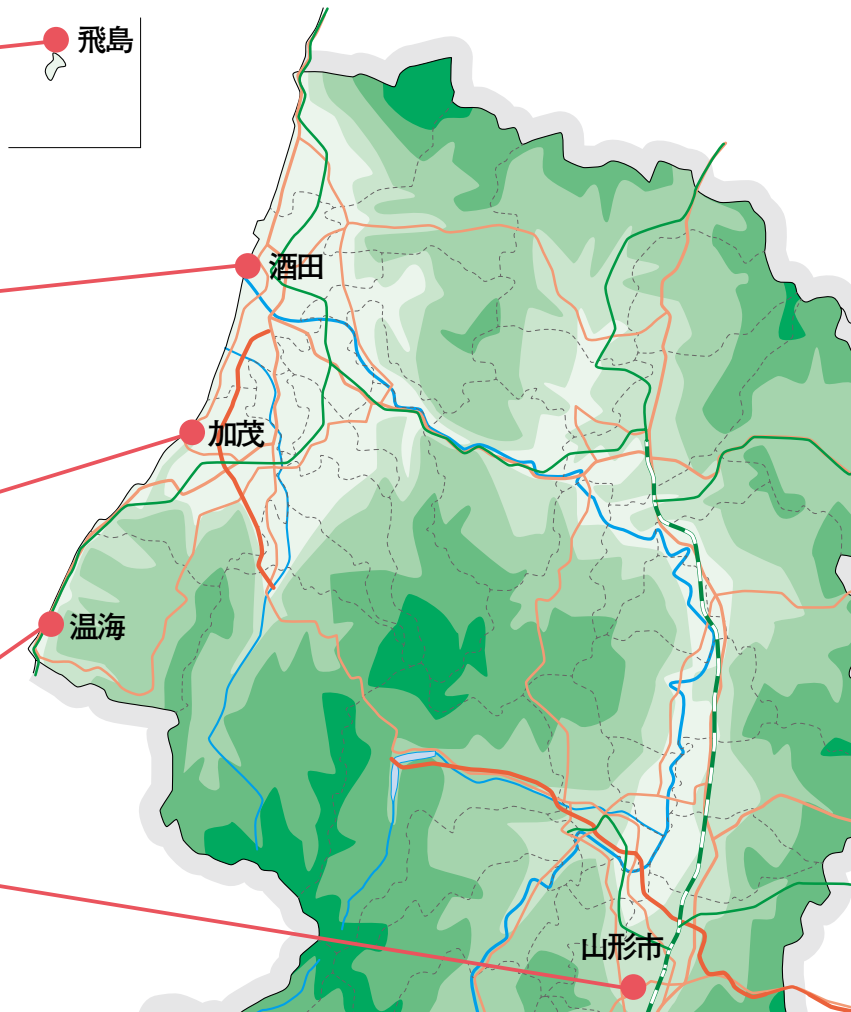
加茂漁港で加茂ヨットスポーツ少年団や加茂水産高校ヨット部が活動。加茂小学校が日本で初めて体育授業にヨットを導入してから32年間、常に連盟のメンバーが授業を支えてきた。

温海セーリング連盟／鶴岡市鼠ヶ関

べにばな国体の会場となった鼠ヶ関マリナーを拠点として温海中学校ヨット部、鼠ヶ関ヨットスポーツ少年団が活動中。ヨットを地域のシンボルスポーツとする温海では、これまでFJワールドや全国自治体、全国少年少女、全国中学校ヨット選手権などを開催。

山形市ヨット連盟／山形市

海から100kmも離れた内陸にあるヨット連盟。普段は日本海でセーリングを楽しんでいるが、普及活動として内陸の湖沼にヨットを運んでセーリング教室を開催している。



山形県セーリング連盟の歴史

山形県の海岸線はわずか110km。創立以来40年を迎える山形県セーリング連盟は、日本海に面した酒田・鶴岡市加茂・温海鼠ヶ関の3水域と内陸の山形市に支部があり、四支部が協力しながらセーリングの普及と競技力の向上に努めている。

日本海や内陸湖沼のセーリングエリアのほかに、映画「おくりびと」の舞台となった、北前船で栄えた港町酒田の40km沖にある飛島は、今もクルージングの寄港地として人気が高く、昭和51年に始まった「飛島回航レース」の舞台ともなってきた。

山形のセーリングの歴史は、駐留軍の米軍士官たちによって昭和20年代に酒田で始まったといわれる。昭和33年頃には、酒田海上保安部職員を中心に、木造スナイプ2艇で「酒田ヨット協会」が設立された。その後、昭和38年に県立加茂水産高校がA級ディンギーを建造し、高校でもセーリングが始まった。

昭和40年代には酒田、加茂、由良、鼠ヶ関などを拠点に、社会人ディンギー愛好者によるクラブが続々と設立され、各水域でセーリング熱が高まった。昭和45年には各水域の代表によって山形県ヨット連盟が設

立された。46年に日本ヨット協会に加盟、47年の鹿児島国体に初めて選手を派遣している。

酒田市ヨット連盟、鶴岡市ヨット連盟、温海セーリング連盟、山形市ヨット連盟の4支部を拠点に、ジュニアクラブからクルーザーセーリングなど、多様な活動を楽しんでいる。毎年6月には月山スキー場と鼠ヶ関マリナーで行なわれているスキー&ヨット大会など、山形の自然の豊かさや遊び心を満喫できるユニークな大会にも取り組んできたが、現在は会員減少のため苦戦中。

また、山形県セーリング連盟は、普及活動として各水域のジュニアヨットクラブの活性化と小・中・高の教育活動へのヨットの定着を試みてきた。加茂小学校、鼠ヶ関小学校、鶴岡中央高校温海校でヨット教室が開催されており、加茂小学校では、32年間、授業の正課としてヨットが行なわれ、鼠ヶ関小もヨットの授業が行なわれている。

本年7月に、全国中学校ヨット大会が温海鼠ヶ関マリナーで開催される。山形での開催は2回目となるが、地元温海と協力し、県連をあげてその準備を進めている。多くの中学生セーラーの参加を待っています。



さすが32年の伝統を感じさせる年季の入ったセールと艇体。修理を重ねながら先輩から引継いできました

日本で初めてヨットを授業に導入した54年には、当時の日本ヨット協会から小沢吉太郎氏が激励に訪れたという。

以来32年もの間、ヨット授業を続けることができたのは、地元のヨット指導者の全面的協力と先生方の熱意による。

学校には立派な艇庫も建設され、保護者も一緒にセーリングを楽しむ加茂ならではの風景が見られる。4～6年生を対象に6月から9月までに5回を実施。

加茂小学校では6年生になると「風を上手につかみ、1人乗りで操船することができる」という教育目標の到達度を確かめ3年間のヨット学習のまとめとするため、加茂港から湯野浜温泉沖までの数マイルの遠航を行うが、クルーザーや救助艇を従えて進むOPの姿は、晩夏の風物詩となっている。

1

鶴岡市立 加茂小学校の授業 「ヨット学習」



隣の湯野浜までクルージング（遠航）。6年生は艦装も1人でできるようになり、もう立派なセーラーです

2

温海鼠ヶ関小学校の授業 「ヨット教室」

小中高から多くの先生が教職員ヨット教室に参加。外人英語教師（ALT＝外国語指導助手）にも人気がある事業です



授業の教育目標として「海を愛し、地域を愛し、命を大切にする子どもを育てる」「温海のシンボルスポートであるヨットを体験させる」を掲げ、6月から7月（3～4回）に、4～6年生全員を対象に鼠ヶ関マリーナで午後の半日を授業にあてている。

教員のほかにも、教育委員会のヨット指導員やマリーナ職員が支援して授業を行う。

また、鼠ヶ関マリーナでは、平成5年に全国少年少女ヨット大会、平成9年には東北少年少女ヨット大会を開催し、ヨットを通じて全国のセーラーとの交流を深めている。



ハーバースターがロープワークを指導。



4年生はペアを組んで学びます



さすが5年生、上手にエイトノットができました

- 昭和54年 加茂小学校で体育の正課としてヨット授業が始まる（日本初）
- 昭和55年 酒田ジュニアヨットクラブ・鶴岡ジュニアヨットクラブ発足
- 昭和57年 温海町鼠ヶ関ジュニアヨットクラブ設立
- 昭和58年 全国少年少女ヨット大会を酒田市内で開催
- 昭和60年 酒田第六中学校にヨット部設立（中学校の部として設置は、全国初）。この年、温海町立念珠ヶ関中学校（現温海中学校）にもヨット部設立。鶴岡市由良ジュニアヨットクラブ発足
- 昭和61年 温海町鼠ヶ関小学校で体育の正課としてヨット授業が始まる
- 平成04年 べにばな国体開催（少年の部の選手全員が、地元酒田六中・念珠ヶ関中、酒田ジュニア出身）。ウラジオストックヨットクラブと酒田市ヨット連盟が姉妹クラブ締結。ジュニア選手の交流始まる
- 平成05年 全国少年少女ヨット大会を温海町鼠ヶ関マリーナで開催
- 平成13年 今井克広（酒田六中ヨット部出身）が全日本スナイプ優勝し、ウルグアイの世界選手権大会に出場。山形県温海で開催された国際FJ級世界選手権に温海中ヨット部・酒田ジュニアヨットクラブの出身が出場
- 平成18年 佐藤勝則（加茂ジュニアヨットクラブ出身）が、全日本SS級選手権大会で優勝
- 平成20年 阿部七海（酒田ジュニアヨットクラブ）が、イタリアの国際ユニセフカップに出場



地元テレビ局の取材を受ける阿部選手



スロープ前で東北ジュニア選手権の開会式。スタートラインまでは岸からわずか100m



冬には最上川のこのあたりに白鳥が飛来します。水深は浅いが、安定した風に恵まれた安全な水面



手作りのクラブハウス。現在では洪水でも安全な土手の上に移動しています。窓から最上川を一望



酒田六中から自転車以最上川にやってくる部員たち。先輩にはスナイプの日本チャンピオンも

かつては、飛鳥中学校・酒田第二中学校・酒田第六中学校にヨットクラブがあった酒田。山形のセーリングの中心として多くの指導者とセーラーを生み出してきた酒田も、指導する教員不足、少子化などのため、学校の部活動としての活動は終わりましたが、一部の中学生選手は30年以上の歴史がある酒田ジュニアヨットクラブの会員としてセーリングを続けています。

日常の練習は最上川で行うため、レースコースは変則コース、1級河川の河川敷にスロープと艇置場、手作りのクラブハウスを持つユニークなクラブです。

3

酒田の

ジュニアヨットクラブ

4

山形県のジュニアヨットクラブ活動と小・中学校ヨット授業の歴史



3つの中学校にヨット部をつくった後藤先生（右から2人目）。ロシアのジュニアクラブを招き羽黒山を案内



国際ユニセフカップに出場し、ナポリの市街を背にセーリング

昭和48年 後藤憲二（県連副会長）が飛鳥小・中学校でOPを製作し、ヨットクラブ創設（東北で初めて）

昭和51年 酒田第二中学校にヨットクラブ設立